

『名物六帖』と『学語編』と

近* 藤 尚 子

The Meibutsurikujō and the Gakugo-hen

Takako Kondo

要 旨 明和九年に刊行された積大典の『学語編』にはその凡例に伊藤東涯の『名物六帖』の名がみえ、参考資料のひとつであったことが知られる。このことを手がかりとして『学語編』と『名物六帖』とを比較した。『学語編』の「類」を『名物六帖』の「箋」に粗々対応させて項目の一致率をみると人品・器財にあつく、人事にうすいという結果が出た。これは『学語編』出版当時『名物六帖』は人品箋・器財箋の二箋しか刊行されていなかったことと関係していると考えられる。また、『学語編』内部の排列を細かくみていくと、『名物六帖』の影響を受けていると思われる箇所が散見する。しかし同時に両書には重ならない部分も多く、それはこの両書が語彙集として異なる方向をめざしていたことを示す。すなわち『名物六帖』はその名のおり「物」と「名」とを結びつけることに力を注ぎ結果として具体的な事物をさす名詞が多く収載されているのに対し、『学語編』はもっと広く「語」を集めている。類や箋による重なるの濃淡はその反映であるという見方も可能である。

はじめに

明和九（一七七二）年に刊行された積大典の『学語編』⁽¹⁾は約八六〇語を収載する語彙集である。その凡例の第一には次のようである。⁽²⁾

此編ハ典籍便覧名物六帖郷談正音雑字通攻等諸ノ類書ヲ主トシ
其他諸書ヨリ采出スル者ナリ繁冗ヲ憚テ一一本書ヲ引サレドモ
一語モ憑拠ナキハナン問常語ニ非ス類書ニ見エザルモノハ其書
ヲ識ス

典拠として右に引かれている四つの書のうち二つめの『名物六帖』⁽³⁾は、伊藤東涯の撰になる語彙集である。本稿は『学語編』の凡例に『名物六帖』の書名が挙げられていることを手がかりとして『名物六帖』と『学語編』とを比較し、この両書がどのように重なりまたどのように異なっているかを明らかにし、さらにそれが何を意味するのかを考察することを目的としている。

ところで『学語編』凡例にある『名物六帖』が具体的にいかなるテキストをさすのかは実は問題となるところである。『名物六帖』

* 本学助教授（今野尚子） 国語学

はその書名が表すとおり、六帖で構成されておりそれがさらに十三の「箋」に分かれている。版本に限っていえば『名物六帖』は享保十二（一七二七）年から安政六（一八五九）年までの百三十年にわたって刊行され、しかも六帖中四帖までしか出版されていない。その状況を次に掲げる。各箋の上に付した数字は刊行順序を示しそれぞれ次の年時に対応する。

①享保十二年 ②宝暦五年 ③安永六年 ④安政六年 *未刊

第一帖 ④天文箋 ④時運箋 ④地理箋

第二帖 ②人品箋

第三帖 ④宮室箋 ①器財箋 ④飲饌箋 *服章箋

第四帖 ③人事箋

第五帖 *身体箋

第六帖 *動物箋 *植物箋 *雑載箋

『学語編』が末尾の刊記どおり明和九年出版であるならば、そのとき『名物六帖』は第二帖人品箋と第三帖器財箋のみが刊行されていたことになる。一方で『名物六帖』は写本の段階からすでに広く知られていた。¹⁾『学語編』凡例にいう『名物六帖』がどのようなものであったかについてはさらなる調査を必要とするので、今それは措くこととし、ここではひとまず版本によって比較を行ない、写本等については必要に応じ言及していくことにする。

I 両書の項目を比較することについて

『学語編』と『名物六帖』とを比較してまず気づくことは、両書

の比較が簡単にはいかないことである。項目の単純な比較というだけでも容易ではない。『名物六帖』の各項目は原則として①漢字列の見出し語②右傍に添えられるカタカナの訓（譯）③出典と引用との三つからなる。一方の『学語編』はほとんどの項目が①漢字列の見出し語②左傍に添えられるカタカナの訓との二つからなる。両書の項目の重なりをみようとすると、何を一つ一致しているというかが問題なのである。いくつかの例を挙げてみよう。両書に共通する「近轂」という見出し語がある。『名物六帖』では「ミヤコヂカク」と付訓され〔畫邊録〕——之民〕という出典・引用が示されている。『学語編』でも「ミヤコヂカク」という訓がみえ、やはり〔畫邊録〕という出典が示されている。この項目は両書で一致しているといつてよいであろう。しかし『学語編』ではこのような形で出典が示されることはむしろ例外なのである。最初に掲げた凡例第一の後半に「一一本書を引サレドモ」とあるように『学語編』は原則として出典を示さない。したがって両書の項目を比較しようとするとき出典は比較の手がかりにならないことがほとんどなのである。また、たまたま『学語編』に示されている出典が『名物六帖』のそれとは異なっている場合もある。「義塚」という項目がある。傍訓は『名物六帖』に「ムエンツカ」、『学語編』には「ムエンツカ」とあり、同じであるともみることができる。しかし出典として『名物六帖』には「宋史理宗紀」・「類書纂要」が示されているのに対して『学語編』には「荒政要覧」が示されている。これを一致とみるのかどうか。さらに多数の項目で、見出し語が同じでありながら傍訓が異なるという状況がみられる。これらを一致とみるのかどうか。ここではひとまず見出し語の一致を両書の重なりとみておくことに

する。なぜならばおそらく両書ともに①漢字列を見出し語として選
び出し、②それに対応する日本語をカタカナで添える、という順序
で成立したと考えるからである。しかし、最初に示したとおり『学
語編』の凡例には『名物六帖』の名がみえてはいるものの、その具
体的な直接の依拠資料を特定しえない現在、両書の項目の重なりが
直ちに両書の直接の関係を示す証左とはならないことに注意しなけ
ればならない。

II 両書の構成について

『名物六帖』は先述の通り六帖十三箋にわかれ、さらに内部が「門」
に細分されている。一方の『学語編』は上巻が二十一、下巻が三十
四、計五十五の「類」に分類されている。類によってはさらに小さ
い分類が施されていることもある(それについては(表3)を参照)。
『名物六帖』の十三箋はすでに掲げたので、『学語編』の五十五類を
次に掲げる。比較のために『名物六帖』の対応する箋を下に示して
みる。

天文、時令・時運、地理までは分類としてほぼ一致するが、それ
からあとの構成はまったく違ってよいほど両者で異なっている。
しかも右の表は門と類とをごく大ざっぱに対応させているのだが、
詳細にみていくと事態はもっと複雑である。

例として、『学語編』釈道類を挙げ、『名物六帖』との対応を(表
2)に示した。この類は五十四の項目から成るが、そのうち三十八
項に『名物六帖』との一致をみる。一致する項目について『名物六
帖』のどの箋に収載されているかをみると、人品箋、宮室箋、人事

表1

『学語編』の類													対応する『名物六帖』の箋									
虫	鳞	果	雜	家	数	舟	刀	漆	財	衣	飲	書		伎	交	言	政	鬼	人	居	朝	天
豕		介	蔬	草	穀	具	量	與	鐵	器	産	服	食	記	戲	遊	語	刑	神	倫	廷	文
		飛	花	食	雜	印	食	兵	響	金				書	雜	行	行	身	官	人		時
		禽	木	菜	器	記	器	器	器	玉				軸	語	旅	事	體	職	品		令
		走	樹	花		身	香	耕	火	磁				文	生	文	生	性	積			地
		獸	竹	草		具	具	具	燭	器				具	齡	才	産	情	道			理
											器	服	飲	器				人	人	宮	天	『名物六帖』の箋
		動物	植物	植物						器	財	章	饌	財			事	品	室	文	時	
																		身	事			地
																		事				理

箋の三箋である。このことから『学語編』と『名物六帖』との構
成に異なりがあることがわかる。つまり、『名物六帖』には人品箋
に隱倫僧道門、宮室箋に祠廟寺觀門、人事箋に僧道作業門があっ
て、建物関係、人の名称、行為にかかわるものがそれぞれに収めら
れている。『名物六帖』の中で求める語に行き着くためには、箋↓

表2 『学語編』釈道類の項目一覧と『名物六帖』との対照

見出し語	傍訓	『名物』の箋・門・丁	『名物』の傍訓	備考
苾芻	シユツケ	人品・隠倫僧道・11ウ	シユツケ	
比丘	—	〃 11オ	ヒク	
沙門	—	〃 11ウ	ハウシ	
桑門	—	〃 12オ	ハウシ	
乞士	—	—	—	
韻僧	フウリウゾウ	〃 14オ	シツクルソウ	
詩僧	シツクリゾウ	〃 〃	シツクル—	
書僧	テカキノソウ	〃 〃	モノカクシユツケ	
茶僧	チャジンノソウ	〃 〃	チャ—	引用一致
醫僧	イシヤスルソウ	人品・醫卜算暦・5ウ	ボウズイシヤ	
厨僧	ナツシヨ	人品・隠倫僧道・13オ	ナツシヨ	
砧基道人	インダイ	〃 12ウ	インダイ	引用一致
粥飯僧	アングランノソウ	—	—	
火宅僧	イツカウシウ	〃 16オ	サイタイノシユツケ	
化飯道人	ハツチバウズ	〃 15オ	ハチモラヒ	
解魔法師	ヤマブシ	〃 15ウ	ヤマブシ	
道民	コウヂユ	〃 17オ	コウジュユ	
道衆	ダウシヤ	〃 17オ	ダウシヤ	
醉髻	サケノミバウズ	〃 14ウ	サケノヨヒハウス	
風和尚	キチガヒバウズ	〃 14ウ	キチカヒハウス	
浮圖	—	—	—	九層浮圖アリ
阿練若	テラ	—	—	練若アリ
蘭若	—	宮室上・祠廟寺觀・25ウ	テラ	
梵刹	—	〃 26オ	テラ	
支提	—	—	—	
麗跋籃	アマデラ	—	—	
祇園	テラヤシキ	—	—	
祇林	—	—	—	
子院	ジケ	—	—	
香火院	ボダイシヨ	〃 27オ	ホタイシヨ	
墳寺	メツザイシヨ	〃 27オ	ホタイシヨ	
上寺	カクノヨキテラ	—	—	
啓龕	カイチャウ	人事・僧道作業・45オ	カイチャウ	引用一致
行乞	タクハツ	—	—	
分衛	—	—	—	
沿街化齋	マチ〜ハツチスル	〃 44ウ	マチウケハチラスル	
沿門抄化	カド〜ハツチスル	〃 〃	イエ〜ハウガ	
募建	コンリウノハウガ	〃 46オ	コンリウハウガ	
募修	シユフクノハウガ	〃 〃	シユフクノハウガ	
募葺	ヤネノハウガ	〃 〃	ウハブキノハウガ	
募冊	ハウガチャウ	〃 46ウ	ハウガテウ	
勸化冊	—	—	—	
化録簿	—	〃 44ウ	ハウガテウ	
輪冊	キンシヤウ	—	—	
喜捨	キンシ	—	—	
過七	ナヌカ〜ノキニチ	〃 45オ	ナヌカコトノトキ	出典一致
生七	—	〃 〃	キヤクシユノナヌカトキ	
齋七	ナヌカ〜ノトキ	〃 〃	ナヌカゴトノトキ	
果七齋	—	〃 〃	ナヌカ〜ノトムラヒ	出典一致
上香使	ダイカウ	人品・典司職掌・22オ	セウカウツカヒ	
國忌行香	ゴキニチノセウカウ	人事・朝儀典章・7ウ	ラメイニチノセウカウ	
赴邑齋	ザイシヨヘトキニユク	人事・僧道作業・44オ	ザイシヨノトキニヨバル、	
晚齋	ヒジ	〃 〃	ヒジ	
嚙金	フセ	—	—	

『名物六帖』と『学語編』と

表3 『学語編』各類の項目数と『名物六帖』との重なり

『学語編』の類と細分類を排列順に掲げる。

数字は 見出し語の漢字列が『名物六帖』と一致する項目数/総項目数 を示す。

*印は比較する『名物六帖』版本がないことを示す。

類	内	訳	一致率%
天文	日月星6/17 雲雨5/27 風3/18 雑9/25		26.4
時令	昼夜19/42 日5/30 時7/20 月12/22 歳12/61		31.4
地理	山7/19 水16/64 海8/14 橋梁5/7 田畝15/50 邦域25/41 市街5/22 道路4/12 土地9/64 沙石4/26 墳墓5/22		30.2
朝廷	64/78		82.1
居処	城郭17/32 官舎6/26 家宅39/120 行舗13/30 屋材17/63 壁障8/23 瓦甃6/23 門戸12/43 宅邊4/26 厠具7/13		32.3
人倫	84/160 称呼84/158 姓籍28/52		53.0
人品	君臣12/46 士庶38/96 職役74/115 傭役51/82 産業172/215 下賤19/23 文藝48/62 女流45/65 姦兇36/61		64.7
積道	38/54		70.4
鬼神	11/45		24.4
官職	29/76 典客8/11 行仗15/29 武官15/25 火役5/8 雑役13/26 獄役7/17 総称23/63 禄米11/21		45.7
政刑	25/119 争訟6/40		19.5
身體	首*5/45 眉*/7 目*6/66 耳*3/21 鼻*/13 口*7/46 面*/21 手*/21 足*/15 髡貌19/86 睡臥8/27 疾疵20/84		*
性情	5/113 愜意0/20 忤意1/29		3.7
言語	18/129		14.0
行事	4/129 卜事5/12 動作0/56 歩行3/15 使役1/18		5.7
生産	2/34		5.9
交遊	13/46 交情7/69 謁見5/30 宴会1/24		20.2
行旅	13/42 音信2/19		24.6
文才	学文4/24 詩文4/31 才名0/26		9.9
伎戯	18/35 優戯6/27		38.7
雑語	0/188		0.0
生齡	生4/33 長9/26 老0/40 病2/38 死3/65 枉死6/14		11.1
書記	46/103 書冊20/39 法帖5/12		46.1
画軸	16/26 裱背30/39		70.8
文具	紙15/46 筆13/31 墨5/15 文房11/19		39.7
飲食	*/84 菜品*/24 食事*13/62 果子*/85 酒*/48 醬豉*/9 茶*/16		*
衣服	絹紬*/46 綿布*/24 衣服*3/145		*
財産	16/65 賣買7/46 収支6/30 借債2/20 簿計1/30 税賦24/30		25.3
金玉	金具45/72 珠玉3/21		51.6
磁器	19/47		40.4
漆器	23/31		74.2
響器	15/41		36.6
火燭	27/54 燈燭36/47 炮烽3/11 火災2/7		57.1
刀鐵	31/62		50.0
兵器	49/107		45.8
耕具	14/54		25.9

類	内	訳	一致率%
舟	輿38/110 輿22/35		41.4
食器	37/76 酒器12/20 茶器33/47		57.3
香具	34/55		61.8
数量	32/69		46.4
印記	17/28		60.7
身具	66/95 女具10/25 笠類8/24 履類12/32		54.5
家具	筵席15/32 床椅7/13 几案12/20 屏障5/8 帷箔12/16 櫛桁4/6 箱櫃12/18		56.4
雑器	釜竈29/41 水器8/26 厨具21/36 掃具8/22 梯4/5		
	筐籠20/29 花瓶16/20 玩具33/40 條繩16/43 染色0/51 紡織22/39 漁獵8/16		52.3
	用具20/31 雑具59/102		
五穀	*5/76		*
食菜	*/171		*
花草	*/148		*
雜草	*/209		*
花樹	*/43		*
木竹	*/110		*
果蔬	*/80		*
鱗介	*/165		*
飛禽	*/102		*
走獸	*/55		*
多虫	*/100		*

門という二段階の分類をたどることになる。箋が上位の分類概念であるため、たとえばここでとりあげたような寺院や僧関係の語はそれぞれの箋について関連する門をみる必要がある。

一方の『学語編』では、分類の基準は類ひとつであり、目次によってそれを見出しさえすれば関連する語は原則としてすべてその類に収められている。ただし、〈表3〉に示したように項目の多い類はさらに細分されている。しかしこの類と細分類は、巻上の天文・時令・地理く人品あたりでは『名物六帖』と通じるところがあるものの、それ以降ではほとんどおなじレヴェルのものである。たとえば衣服類の細分類として衣服があり、舟輿類の下が舟と輿とに別れているときである。『名物六帖』のような、全巻を通じての意味の二重階層というものはみられない。『学語編』の細分類を類の下位分類と位置づけないのはこのためである。このような状況であるから、ひとつの類の中に『名物六帖』のいくつかの箋の語が収められるのは当然である。さらに「醫僧」「上香使」「國忌行香」はそれぞれ人品箋の醫卜算曆門、典司職掌門、朝儀典章門にみえている語である。たとえば「醫僧」を『名物六帖』は「醫」に注目して醫卜算曆門に置き、「学語編」は「僧」に注目して積道類に置いたのである。ちなみに医者関係の語は『学語編』では人品類文藝の中に十四語が収められ、うち十二語に『名物六帖』との一致をみる。

『学語編』は上下二巻あわせて約百丁の小冊である。そのことがこのような類のみによる検索を支えているとみることもできる。しかし『名物六帖』の前身である『応氏六帖』が、二千語程度の段階で六帖十八箋（ただし下位分類としての門はない）という組織を備えていたことを考えると、両書の異なりはそもそもその出発点からの

ものであるといわざるをえない。さらにいえば『応氏六帖』にしても『名物六帖』にしても「六帖」という体裁を東涯が意図したときに箋↓門というレールが敷かれていたのかもしれない。⁵⁾

稿者はすでに『学語編』傍訓のカタカナ表記に傾向を見出し、独自の方針によって表記されていることを報告している。そしてここでの検討の結果からも、『学語編』が独自の構成をとっていることを確認できる。両書の比較が困難である第二の理由として、このように両書の構成が異なっていることがあげられる。

Ⅲ 重なるの濃淡

さて、『学語編』積道類を『名物六帖』と対照させると、『名物六帖』では三箋にわたっており、五十四項のうち三十八項に一致をみることはⅡで述べたとおりである。ここではその状況についてももう少し詳しくみていく。〈表2〉をながめるとこの類の項目の並び方はほぼ人品・宮室・人事のブロック別になっている。第一項から風和尚までが人品に、浮圖から上寺までが宮室に、啓諭から最後の項目までが人事にあたる。このうち浮圖は註に「塔ノ事ナリ轉シテ僧ヲ称ス」とありここでは人品から宮室への橋渡しのな役割をもってあるのかもしれない。『名物六帖』には宮室箋に「九層浮圖」があり「クチウノトウ」と付訓されていて、これは明らかに塔のことである。また、人事の項目の中に「上香使」という『名物六帖』では人品箋に収載されている語があるが、これは「焼香」ということで國忌行香と一緒に置かれたものであろう。このようにひとつの類をブロック分けしたうえで『名物六帖』との一致状況を見ると、ブロックによってその状況が異なっていることに気づく。人品では二十

一語中十九語が『名物六帖』と重なっているのに対し、人事では二十一語中十五語、宮室では十二語中四語である。一致率というならば、人品が九〇・五%、人事七一・四%、宮室は三三・三%となる。

〈表3〉から明らかにもともとこの積道類は『学語編』の中でも七〇・四%と『名物六帖』との一致率が高い類なのであるが、宮室の三三・三%は示唆的である。〈表3〉の居処類の一致率三二・三%とはぼおなじなのである。その他、類によって『名物六帖』との一致率に相当の差があることがわかる。それぞれの類の一致率をまとめ、〈表1〉での対応にしたがってほぼ内容別に示すとつぎのようになる。

天文	二六・四%	時運	三一・四%	地理	三〇・二%
宮室	三二・三%	人品	五七・四%	人事	一六・〇%
器財	五一・一%				

天文・時運・地理・宮室が三〇%前後であるのに対し、器財五一・一%、人品五七・四%と高く、人事は逆に十六・〇%ときわめて低い。『学語編』が出版された明和九年の時点で『名物六帖』中すでに刊行されていたのは人品箋と器財箋とであった。そのこととここで的一致率の高さとは無関係ではないと思われる。もちろんこの数値は〈表1〉と同様、『学語編』の類を『名物六帖』の箋に大きくばに対応させて算出したものであるから、厳密とはいえない。細かくみていけば積道類というひとつの類にも人品・宮室・人事の三箋にわたる語が含まれているのである。積道類はその意味で『学語編』の中でも極端な類のひとつであるが、他のいくつかの類にも同様の状況はみえている。しかし積道類で行なったような作業をほか

の各類についても行ない、厳密なブロック分けをすることにそれほどの意味はないであろう。本来、両書の構成は異なっているのであり、ふり分けられた結果は実在の分類ではないものだからである。また、すでに述べたとおり、積大典が参照した『名物六帖』がはたして版本であったのかどうかもわからない。ここではおおよその傾向がつかめればよいと考える。

ここでは右の数値から、すでに刊行されていた人品箋・器財箋については版本かそれに近い写本をみていた可能性が高いのではないかとひとまずは考えておきたい。

IV 排列にみられる一致について

最初に掲げた『学語編』凡例の四つの典拠のうち、『典籍便覧』『郷談正音』は『名物六帖』にとっても主要な典拠であった。したがって、『名物六帖』を介さずに結果的に項目が一致する、ということも十分に考えられる。Iで述べたように項目の一致は必ずしも両書の直接の関係を示すことにはならないのである。しかし『学語編』の項目の排列をみると『名物六帖』の影響を受けていると思われる部分が散見するのである。

たとえば積道類では〈表2〉に示したように第六項から第九項が韻僧・詩僧・書僧・茶僧となっている。この四項は『名物六帖』にも収載されており、第二帖人品箋二・十四丁表にある。その出典と排列は、書僧〈楊升庵集 引用あり〉・詩僧〈見上〉・韻僧〈同上〉・茶僧〈韻府 引用あり〉となっている。楊升庵集が出典として示されている三項は『名物六帖』と『学語編』とでまったく逆の順序になっている。これは直接出典にあたり両書が別個に採録した可能

性も考えられる。しかしこの三項の後に茶僧が置かれることは偶然の一致とは考えにくい。その後の醫僧が『名物六帖』と『学語編』とで大いに異なることは先述のとおりである。もう一箇所、例を挙げる。『学語編』巻下雜器類紡績の紡車以下十四項を『名物六帖』第三帖器財箋蚕織女紅門の対応する部分と対比させて一覧すると〈表4〉のようになる。紡車以下の十四項はすべて『名物六帖』にもみえる語である。その排列は表にみるごとく繰車・歴鹿車の二語を除いて『名物六帖』の項目の流れに沿っている。その後は緯管・木梭などが続くが、これらは『名物六帖』では同じ門でも離れたところにある。このように『学語編』の中には部分的にはあるが『名物六帖』の排列と重なるところが散見する。これを偶然の一致としてかたづけざるべきではないであろう。

もうひとつ、明和九年には出版されていなかった人事箋の例を挙げておく。

『学語編』巻上身體類躰貌にある「京様」以下八項はこの類の中でも集的に『名物六帖』との重なりがみられる部分である。この細分類そのものの『名物六帖』との一致率は二二・一％で、人事関係の類の中ではやや高い程度であるが、連続して八項が重なる「京様」以下はとくに目をひく。それを『名物六帖』第四帖人事箋四體勢作用門の最初と対照させたものが〈表5〉である。『学語編』ではこの後に「女装」があり、この部分だけに關していえば、「様・氣・一相・一装」のように見出し語の後部要素によってまとめてあるようである。さきほどの積道類第六項から第九項も「一僧」という語が六つ並んでいる箇所であった。『名物六帖』の内部が排列に關してそれほど気を配っていないようにみえるのに対して、工夫が

『名物六帖』と『学語編』と

表4 『学語編』(紡車以下)と『名物六帖』との対応表

『学語編』		『名物六帖』
紡車イトグルマ	←	繰車イトクリクルマ 紡車イトヨリクルマ 麻苧紡車アサイトヨルクルマ 木綿紡車モメンイトヨルクルマ
(繰車) 緯車	←	緯車イトヨリクルマ 歴鹿車イトヨリクルマ
繰車 筥車 (歴鹿車)	←	繰車イトヨリクルマ 筥車イトヨリクルマ 木綿撥車モメンカセノマイバ 麻芳撥車アサイトノマイバ
蟠車マヒバ	←	蟠車マイバ 撥拵マイバ
車拵 紡車絃ハヤイト	←	車拵マイバ 紡車絃ハヤイト
趕車ワタクリ	←	趕車ワタクリクルマ
木綿攪車	←	木綿攪車キハタクルクルマ 経架タテヘルタナ
線車ワク	←	線車ワク 欄ワク
絡柅	←	絡柅ワク 絡子ワク 絲拵ワク
絲鑿	←	絲鑿ワク

表5 『学語編』(京様以下)と『名物六帖』との対応表

『学語編』		『名物六帖』
京様ミヤコフウ	←	京様キヤフウ
野様イナカフウ	←	野様イナカフウ
村氣イナカギ (客氣ツケヤキバ)	←	村氣イナカゲ 官様クゲフウ
吏氣ヤクニンカゼ	←	吏氣ヤクニンカセ 得色エタリカホ 後ろにあり 痕記イモノアト 風度ナリフリ 髮首フリエリツキ 風貌ヲトコフリ 風貌不揚オトコフリアシ、 有肌シ、カアル 怖勢コハカルテイ 手勢シカタ 客氣ウハキシヤウ 人様子ヲトコフリノテホン 男粧ヲトコテタチ 女装ヲンナテタチ 胡装タツタンヤウソク 妆容ワカスカタ 霽威キケンヲナラス 解容キケンヲナラス 貴相タツトキサウ (窮相ヒンナニンサウ) 劣相ゲヒンナニンサウ (男粧オトコノナリ) 弱相ヲモテヨハイ 窮相ビンホウカホ

あるというべきであろうか。あるいは『学語編』の参照した『名物六帖』写本の語順が版本とは異なっていたということも考えられる。

V 語の選択

さて、今みてきた『学語編』の「京様」以下八項は、『名物六帖』版本と確かに重なっているが、『名物六帖』では(表5)によれば

この部分に二十七語ある。つまり十九語は『学語編』にはみられないものである。規模の全く異なる両書ではこれは当然のことであるし、『学語編』の参照した『名物六帖』の写本は、版本よりもずっと語数の少ないものであったかもしれない。しかし同様のことが、すでに出版されていた人品・器財関係の類についてもいえるのである。

たとえば『名物六帖』人品箋二隠僧道門は最初に僧籍にある者

をいう語としてつぎの十九語を収載する。収載順に掲げる。

僧正 僧録 上人 比丘 碩学 沙弥 息慈 僧伽 闍黎
苾芻 沙門 杜多 頭陀 桑門 出家 大徳 徳士 紫衣僧
紫服僧

このうち『学語編』にみえるのは傍線を付したわずか四項である。しかも苾芻・比丘・沙門・桑門という語順である。この排列からは『名物六帖』の影響をみることはむずかしい。しかし逆に『学語編』のほうからながめれば、〈表2〉から明らかかなように僧籍にある者をいう語として収載されている五語のうち「乞士」を除く四語が『名物六帖』と重なるのである。両書がどのような基準で語を選び排列しているのかについてはいろいろな方向からさらに考えていかなければならない。稿者はすでに『名物六帖』の考察において「ここで選ばれているのは単なる屏風・文台・手箱などではなくて、上に修飾語のついた、いわば特別なものなのである。単なる馬や鎧はここでは選択の域外にあるということになる」と述べた。⁷⁾僧正以下ここにあげた十九語は「上に修飾語のついた」ものではないが、たとえば和文脈にも出てくる「法師」はとられていない。法師は『名物六帖』のこの部分でも五項で傍訓としてみられるところからもごくありふれた語であると考えられるが、それがなく、ということにもひとつの選択をくみとることができるのではないだろうか。さらにいえば、『学語編』における積大典の意図は、『名物六帖』を超える大部の語彙集を作ることではなく、むしろハンディなものを作ることであった。その意味で『学語編』の項目は『名物六帖』よりもっときびしく選択されているとみることもできるであろう。『学語編』では、傍訓にまず掲げられた「シユツケ」は見出し語としてはとら

れていない。右に掲げた十九語に関してのみいうならば、ごくありふれた語である「出家」はとらず、また逆にあまりにも仏教色の強い語もとらず、いわば第二段階の語を選択している、とみることができる。

〈表4〉では『学語編』の十四語はすべて『名物六帖』に一致し、しかも排列もほとんど同じであった。そこには明らかかな『名物六帖』の影響をみることができているが、『名物六帖』にはこの部分に二十三項が含まれる。『学語編』はそのうちの約半数を選択しなかったことになる。ここで一々の項目についてたとえば木綿攪車をとらずに木綿攪車をとったのはなぜか、などと検討していくことにはそれほど意味はないであろう。個々の語の出入りの背後にあるものに対する目配りが必要となるであろうが、それは後考をまつこととしたい。

おわりに

以上述べてきたように『学語編』にはその凡例の記述の通り『名物六帖』を参照したとみられる状況がさまざまなかたちでうかがえる。両者の比較は単純に見出語の一致や訓の一致ということだけではすまされないことがらのようである。傍訓や出典についていえば、意識的に別のものを付加するという可能性すら考えられる。一致が影響の証左となるなら逆に不一致が証左となることもありうる。見出し語にしても『名物六帖』に「紙招児」(カミノカンハン)とあり『学語編』に「紙招」(カミカンバン)とあるものをどう判断するか。「設廳」「廳事」の二項が『名物六帖』ではともに「マンドロロ」とあるのに『学語編』では「マラシツラフ」「オモテノマ」

としてある場合にこれを一致とみるのか。Iでも述べたとおり一口に比較といってもそれは容易ではない。しかし『学語編』凡例には『名物六帖』の名があり、ⅢⅣで述べたように確かに影響をよみとることができる。『名物六帖』の名はすでに出版される前から広く知られていたし、いくつかの文学作品や辞書などへの影響も指摘されている。しかしきめの細かい考察をさらにつみかさねていく必要があるのではないだろうか。そのことがそれぞれの書の性格を明らかにしていくことにもつながる。

最後に〈表3〉においてとくに一致率の低い門について考えておく。『学語編』五十五類中『名物六帖』との重なりが際立ってうすいのは、性情類(三・七%)行事類(五・七%)生産類(五・九%)雑語類(0%)の四類である。このことは両書の性格に深くかかわっていると考えられる。『名物六帖』はその書名が示すとおり、物の名とその物とを対照させる「名物」学の書である。そして「森羅万象に関する「実学」すなわち名詞の考証を専門とする特殊字典」である。つまり『名物六帖』に収載されている語は多く具体的な「物」をさす語である。もちろん六帖の中には第四帖人事箋があつて、そこには動作・行為をあらわす語も含まれてはいる。しかし大部分の語は、たとえば人事箋や器財箋には分類しきれない名詞なのである⁽⁹⁾。一方の『学語編』には、「名物」ではなく「学語」という書名が示すとおり、名詞に傾くという特殊性はみえない。その、両書の語彙集としての性格の差が、項目の重なるの濃淡の中にもあらわれているのではないだろうか。『学語編』の「語」がどのようなものであるのかについてはさらに考察を進めていく必要があるだろう。

(註)

- 1 『学語編』版本の刊記はすべて「明和九年」となっており版本も同一であるが、初刷りと、全体にわたって多数の修を施した後刷りとがある。本稿では唐話辞書類集第十六集所収の影印によって比較を行なった。底本は長澤規矩也氏蔵本。後刷りである。
- 2 以下、本文の引用に際しては現行の表記に改めたところがある。へんは細字双行、/は改行を示す。また、とくに必要のない場合は、傍訓や出典・引用を省略した。
- 3 『名物六帖』は朋友書店から影印刊行されている。底本は平岡武夫氏蔵本に未刊部分を天理図書館の東涯自筆稿本によって補う。天理図書館複製第五十八号。
- 4 たとえば版本『名物六帖』の奥田士亨の跋や、湯浅常山の『文会雜記』の記事などがよく知られている。
- 5 このことに関して稿者は「辞書として『名物六帖』をみるとき、意義分類を貫いているという点で他書とは袂を分つ。(中略)意義分類を貫いた『名物六帖』の排列方法は空前であり、以後の書にもほとんど受け継がれていない。その中で、積大典の『学語編』は凡例に『名物六帖』の名をあげ、排列も同様の意義分類を貫く。しかし、小本二冊仕立ての簡略な物で『名物六帖』には質・量ともに及ぶべくもない。」と述べたことがある。(『応氏六帖』の資料性)文化女子大学研究紀要第二十三集 一九九二年) この記述中の、量に関してはともかく、質に関しては両書のいきかたの異なりととらえるべきであると考えている。
- 6 拙稿「訓の表記からみた『学語編』——辞書の編集方針とのかかわり——」(文化女子大学紀要 人文・社会科学研究 第四集 一九九六年)
- 7 拙稿「『応氏六帖』と『大明会典』」(文化女子大学紀要 人文・社会科学研究 第二集 一九九四年)
- 8 杉本照『近世実学史の研究』(昭和三十七年 吉川弘文館) 四二〇ページ
- 9 『応氏六帖』と『名物六帖』との比較において稿者は「所屬箋の問題は人事箋と器財箋とにかかわるものが多いことに気づく」と述べたことがある。(『応氏六帖』と『名物六帖』)文化女子大学紀要 人文・社会科学研究創刊号 一九九三年)